

# イスタンブール再訪

写真・文 鈴木 均  
Hitoshi Suzuki



タクシムから望むボスポラス海峡の夜明け。

夏のラマダーン月にイスタンブールで「国際イラン学会」が開催されるというので、二四年ぶりにイスタンブールを再訪した。私がイスタンブールを訪れるのはこれで三度目である。イスタンブールはビザンチン帝国の時代からの帝都であり、現在も天才建築家スィナンの設計になる数々のモスクなどの美しい建築が観光客を魅了している。だがそのようなことだけではなく、私はイスタンブールには特別の思い入れがある。

私は修士の学生時代に一九世紀後半のイスタンブールでアーゼリー系の開明的イラン人が出していた立憲主義の新聞『アフタル』と巡り合い、その時の修士論文をもとに「イスタンブール在住イラン人とタバコ・ボイコット運動」を発表した。このテーマでは最近、慶應義塾大学名誉教授の坂本勉先生がさらに広い観点から議論を再構成している<sup>(注)</sup>。

そもそもイスタンブールは、近代黎明期のイラン人にとって先進的なヨーロッパへの中継地点として特別な意味をもっていた。イランという国は北側にカスピ海を望み、南側ではペルシャ湾に面していてオマーン湾からインド洋への唯一の出入り口となっている。だがイランにとって外洋に繋がる海はこれだけであり、一年の四季を通じて快適な港町というものが無い。ペルシャ湾内のバンダル・アッバース港もブーシェフル港も、夏には摂氏五〇度を超える高温多湿の気候によって利用者を遠ざけてきた。

これらペルシャ湾岸に面したイラン国内の港町と比べ、ダーダネルス海峡を抜ければエーゲ海に入り、そこから地中海世界にアクセスのできる気候温暖で開放的なイスタンブールは、近代前夜の開

(注) 坂本勉「イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブール」(上・下)、『史学』第81巻1・2号(2012年3月)83-116頁；第81巻第3号(2012年7月)49-89頁。





アヤソフィアの大ドームは世界最大級の規模（直径約31m）を誇る。



旧市街の小路からアヤソフィアを遠望する。



観光客を相手にトルコ式のコマを売る少年。

明的なイラン人商人たちにとって憧れの国際的港湾都市であったに違いない。一九世紀にはイスタンブルに大規模なイラン人コミュニティが形成されていたとしても何ら不思議なことではないのである。

今回このイスタンブルで「国際イラン学会」が開催されることになったのは、現在のイランの核開発問題に起因する国際的な孤立状況などから、欧米都市で開催した場合にイラン国内からの出席者が少なくなるという懸念があったと聞いている。だがこのような学会をイスタンブルで開催したもうひとつの理由は、やはりイスタンブルが現在のイラン人にとって特別の意味をもつ国際都市であるからだろう。今回イスタンブルを二四年ぶりに訪れて、私自身もこの港町の独特の開放性と国際性に対する思いを改めて強くもった。

さて今回は観光客がよく利用するタクシム広場の周辺に宿を取った。タクシムはヨーロッパサイドの北東側の小高い丘の上に位置し、ホテルの窓からはボスボラス海峡がよく見渡せた。またタクシムからイスタンブル最大のショッピング街であるイスティラル通りもすぐ間近である。

市内の公共交通も以前とは一変しており、タクシムからカバタシュまでの急こう配の短距離の地下鉄を利用して、そこから路面電車（トラム）でもものの三〇分で旧市街に出ることができる。このトラムを利用すれば、アヤソフィアからブルーモスク、大バザールといった旧市街の主要スポットを効率的に移動





ブルーモスク前の土産物店で。イスラム教とキリスト教の意匠が混在する。



アヤソフィアに向かい合うように建つブルーモスク。



イスタンブルの新交通機関トラム。現在4系統走っており、ホテルの集中するタクシムからガラタ橋を抜けて旧市街に向かうのにも便利である。



アヤソフィアにほど近い「オスマン朝研究財団」では、絨織を干していた。

することもできる。

これらの新都市交通は公共バスを含めて、チャージ式の「イスタンブルカード」を利用すれば一元的に利用可能である。逆にこのカードがない場合、交通機関の利用にいささか支障が出ることは東京などと変わらない。

私が訪問する機会のなかったこの二〇余年のあいだにアヤソフィアのほど近くで「地下宮殿」の遺構が新たに整備され、今では観光名所になっていたことも印象深かった。これはビザンチン帝国時代に造られた貯水施設ということだが、イスタンブルという土地の歴史的な厚みはまだまだこうした未開発の観光資源を内包していることだろう。

ラマダーン期間中とはいえイスタンブル市内のレストランは通常と同じく営業しており、エフェスビールなどのアルコール類も特に制限はなかった。この自由さと開放性こそが以前から多くのイラン人を引き付けてきたこの港町の魅力なのだろう。私の投宿したホテルでもイラン人の旅行者を見掛けることができた。

トルコ共和国になってイスタンブルが首都の地位をアンカラに譲ったことは、この町の独自の文化の維持・発展のためにむしろ大きなプラスの効果をもたらしたのではないだろうか。この町の開放的で自由な文化は、何らかの政治的な制度によって保障されているのではない。むしろイスタンブルという国際的な港湾都市のなかに文化的な基層として埋め込まれてしまっているように思われる。





私が最初にイスタンブルを訪れたのは一九八二年、大学四年生の春であった。親しい友人と二人のバックパッカー旅行の終点に立ち寄ったイスタンブルは春の慈雨が降り、中東を初めて訪れた無謀な旅行者の疲れた心を癒してくれた。

二度目に訪れたのはその六年後、この時はある調査団に加わり、イランからシリア、トルコへと社会調査を続けた最終地としてイスタンブルに逗留した。この時は次に同地を訪れるまでに二四年もの歳月がかかるとは思ひも寄らなかつた。だが私にとってイスタンブルは特別な場所であり、イラン人商人とイスタンブルの関係についての考察はこれからも私の研究上の隠れたモチーフであり続けるであろう。

二度目に訪れたのはその六年後、この時はある調査団に加わり、イランからシリア、トルコへと社会調査を続けた最終地としてイスタンブルに逗留した。この時は次に同地を訪れるまでに二四年もの歳月がかかるとは思ひも寄らなかつた。だが私にとってイスタンブルは特別な場所であり、イラン人商人とイスタンブルの關係についての考察はこれからも私の研究上の隠れたモチーフであり続けるであらう。